

使徒の働き11章19－30節 「異邦人の救われる教会」

1A アンティオキアでの教会誕生 19－26

1B 異邦人への福音宣教 19－21

2B バルナバによる励まし 22－24

3B サウロの参加 25－26

2A 預言と援助の働き 27－30

本文

使徒の働き 11 章を開いてください。私たちの学びは、前回 18 節まで来ましたので、19 節から始めていきます。

ユダヤ人ではない人々、異邦人も、イエスを信じる信仰のみによって救われることを、主は、ペテロに証言させるようにされました。カイサリアにいるローマの百人隊長コルネリウスの一家が、ペテロの語る、神のことばを聞いているだけで、聖霊のバプテスマを受けるようにされたからです。そして、そのことをエルサレムにいる兄弟たちも、ペテロの説明を聞いて、認めることができました。これが、前回までの話です。

そして今晚は、その続きを見ます。ついに、福音を、ユダヤ人ではない人々にも、ユダヤ人の信者が宣べ伝え始めるのです。それで、異邦人たちが主を信じていくのですが、それをエルサレムは問題だと思わずに、むしろ喜び、バルナバを遣わします。こうやって、主は、少しずつ、それぞれの場所で、ご自身の計画、すなわちユダヤ人だけでなく、異邦人にも救いをもたらす計画を、実行していわれています。

1A 異邦人の救いの教会 19－26

1B 異邦人への福音宣教 19－21

¹⁹ さて、ステパノのことから起こった迫害により散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで進んで行ったが、ユダヤ人以外の人には、だれにもみことばを語らなかった。

私たちは、異邦人に対する主のお働きを、少しずつ、伏線をかなり初期から見えていました。それは、ギリシア語を話すユダヤ人が、ヘブル語を話すユダヤ人に対して、やもめの配給のことで不満を訴えたところからです。それで、使徒たちは、ギリシア系のユダヤ人七人を、給仕する者たちとして任命しましたが、その一人がステパノです。彼が、福音を力強く語ったために、石打による殉教しました。そして、そのことによってエルサレムで強い迫害と弾圧が始まりました。

そこでその迫害者の筆頭であるサウロが、ダマスコに行く途上で、復活のイエスに会い、劇的な回心を経たことを見ました。それも、異邦人への救いの大きな備えなのですが、それ以外にも、迫害によって散らされた人々が北上していったところにも表れています。フェニキアは、今のレバノンです。地中海沿岸で、カルメル山よりも来た、ツロやシドンのあるところがフェニキアです。そして、その沖合にある、東地中海の浮かぶ島がキプロスです。バルナバがキプロス出身で、後にサウロとバルナバが、アンティオキアから遣わされる初めの場所が、キプロス島になります。そして、フェニキアをさらに北上すると、シリアのアンティオキアの町があります。

まず、改めて、私たちは、神は迫害や試練によって、ご自分のわざを進められるということを知りたいと思います。神とキリストを信じる者たちに反対するのは、悪魔のしわざです。しかし、神の民に反対する時に、主は力強い腕を伸ばされます。エジプトでファラオが、イスラエル人を奴隷として使役していた時に、主がモーセによって、「わたしの民を去らせなさい」と言われました。ファラオが拒めば拒むほど、災いが降り注ぎ、ついに、エジプト中の長子が打たれて死に、紅海の中でエジプトの精鋭部隊と共に死んだのです。

教会についても同じです。主が、ペトロや弟子たちに約束されていたのは、「マタ 16:18 わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」という約束でした。こうして、教会は苦しみの中で、さらにその信仰が清められ、信仰が清められると聖霊が強く臨まれ、力を持ちます。そもそも、それぞれの信仰が、何らかの苦しみや試練と共に、人々に与えられ、そこに御霊の慰めと励ましがありませんでした。私たちの主、キリストご自身が、苦みを死を通られたからこそ、よみがえられたのです。復活の力が、迫害によって現れるのです。

私たちは、ある意味、体裁が整わない中で、もみくちやにされる中で、主が事を運んでくださいます。よくよく考えれば、やもめの配給で不公平感を抱いたところから始まったのです。そして、なんとか知恵が与えられたのですが、主はそこから、福音宣教者をお立てになります。そして、その一人ステパノに強硬に反対している者を、今度は福音宣教者にします。そして今、迫害から逃げているという、ちょっと情けない状況を、主は、ご自分の計画に用いられているのです。

しかし、福音を語る中で、「ユダヤ人以外の人には、だれにもみことばを語らなかつた」と、ルカは記しています。これは、今まで学んできたように、主イエスが、地の果てにまでわたしの証人となると言われた約束は、あくまでも離散したユダヤ人たちに福音を宣べ伝えることだと、当時の彼らは受け止めていました。ユダヤ人の信じる約束のメシアは、ナザレ人イエスなのだということで、彼らに語っていたのです。

²⁰ ところが、彼らの中にキプロス人とクレネ人が何人かいて、アンティオキアに来ると、ギリシア語を話す人たちにも語りかけ、主イエスの福音を宣べ伝えた。²¹ そして、主の御手が彼らとともにあ

ったので、大勢の人が信じて主に立ち返った。

さりげなく書かれている、この箇所が、大きな出来事、分岐点です。キプロス人とクレネ人とは、キプロスから来たユダヤ人、クレネから来たユダヤ人ということです。例えば、バルナバは、キプロス人でした。イエスの十字架を背負ったシモンはクレネ出身なので、クレネ人です。彼らは、ギリシア語を話すユダヤ人でした。彼らが、ユダヤ人であるにもかかわらず、「ギリシア語を話す人たちにも」つまり、ユダヤ人ではないギリシア語を話す異邦人にも語りかけたということです。

キプロスやクレネのユダヤ人は、自分自身ギリシア系のユダヤ人であり、自身、ヘブル語よりもギリシア語のほうが、はるかに上手に話せることでしょう。ヘブル語を話せないかもしれません。けれども、もちろんギリシア語を話す人たちには、ユダヤ人よりも異邦人のほうが多いです。当時のローマ社会は、共通語はギリシア語です。ですから、ギリシア語を話し続けるならば、異邦人に語りかけるほうが、もっと確率が高いのです。もしかしたら、彼らもそれほど意識せずに、語り始めたのかもしれません。語って見たら、実はユダヤ人ではなく、異邦人だったということがあり得ます。

そして伝えたのは、「主イエスの福音」です。イエスが主であり、この方こそが、私たちの良い知らせなのだと宣べ伝えました。ユダヤ人と異邦人は、変わらない同一の福音です。

そうしたら、「主の御手」が彼らとともにありました。エズラ記を見ると、学者エズラがペルシアからエルサレムに帰還するにあたって、「主の御手が彼の上にあった」という言葉が多くでてきます。例えば、彼の仕えるペルシアの王に、帰還をお願いしたところ、かなえられました。それで、「7:6 このエズラがバビロンから上って来たのである。彼はイスラエルの神、【主】がお与えになったモーセの律法に通じている学者であった。彼の神、【主】の御手が彼の上にあったので、王は彼の願いをすべてかなえた。」許されない、また、そんなことをいって、王から罰せられる危険さもありました。けれども、願いをかねえてくれたのです。

そして、エルサレムに無事に着いたことについても、「7:9 すなわち、彼は第一の月の一日にバビロンを出発した。彼の神の恵みの御手は確かに彼の上であり、第五の月の一日に、彼はエルサレムに着いた。」とあります。ペルシアのスサから、エルサレムまでは非常に長い距離です。再建された神殿に奉納する金銀を携えていたのですが、それでも護衛を頼みませんでした。それでも無事に到着できたのです。このように、一歩、一歩、前進できているのは、そこに、主ご自身の手が置かれているからであります。

そして、「大勢の人が信じて主に立ち返った」とあります。信じて、主に立ち返っています。彼らが異邦人であっても、ユダヤ人であっても、みな、主によって造られました。しかし、自分を造った方を知らずに、生きてきました。「ヨハ 1:10 この方はもとから世におられ、世はこの方によって造

られたのに、世はこの方を知らなかった。」したがって、ユダヤ人でなくとも、自分を造られた方から離れていたのですから、主に「立ち返る」のです。

それから、信じて、立ち返ったと並べられているのも大事です。信じるということには、立ち返り、すなわち悔い改めが必要です。語られたことが初めて聞くことであっても、それを信じます。けれども、信じるには、今までの自分のあり方、何よりも造り主に背いて生きてきたことを悔い改めます。悔い改めは行いだから、信じるだけでよいのだ、悔い改めはいらないという人々がいます。これは、大きな間違いです。これまでのあり方を悔いて、罪を悲しみ、思い直し、それでイエスがこれから自分の主であると決めるのです。この悔い改めがあって、初めて信じるということが、本当に信じていることになります。

アンティオキアの町ですが、当時、ここはローマ帝国全体で、第三の都市でした。ローマ、エジプトのアレクサンドリア、そして、ここシリアのアンティオキアです。（今は、トルコ領で、アンタキヤと呼ばれます。）当時、50 万人はいたと言われています。そして、離散ユダヤ人の数も多く、一割以上がユダヤ人だったと言われています。使徒の働き 6 章で、給仕をする七人の一人に、「**アンティオキアの改宗者ニコラオ（5 節）**」がいました。



ここには、紀元前は古代にヒッタイト帝国があり、その後、古代ギリシア人がアナトリア半島に植民しはじめました。そして、アレクサンドロス大王がマケドニアから来て攻め取り、ギリシア帝国は四分割されて、ここはシリアのセレウコス朝の中に入ります。アンティオキアは、セレウコス一世が父アンティオコスにちなんで付けた名です。セレウコス一世が死んだ後に、ここがセレウコス朝の都となります。

今のトルコ、アナトリア半島は、西は欧州、東がアジアです。そして北がロシア、南がアフリカです。東西南北に大きな国々や文明がありますから、この地域は巨大な貿易路になっています。アンティオキアも同じで、非常に繁栄した町になりました。私は、2019 年にここを訪れましたが、ハタイ考古学博物館には、数多くのローマ時代のモザイク画が展示されています。

そして商業が発達しているので、ここに不道德な慣習もはびこっていました。偶像礼拝も、盛んでした。この町は、シリアから地中海に流れていく長い河、オロンテス川が街の真ん中を走っています。それで、ダブネーというギリシア神話の女神が祀られており、女祭司という名の売春婦がたくさんいました。ですから、商業が発展し、貿易の中継地であり、民族的にも文化的にも多様性があったことでしょう。そして偶像礼拝や淫行もたぶんにあったという町に、世の光として、力強い教会が建て上げられるのです。

2B バルナバによる励まし 22-24

²² この知らせがエルサレムにある教会の耳に入ったので、彼らはバルナバをアンティオキアに遣わした。

主が、コルネリウス一家の救いを、ペテロの証言を通して、エルサレムの教会が認めたことは、このアンティオキアにおける働きの、神の準備であったことが分かります。このことがあったから、エルサレムの教会は、すぐにバルナバを遣わすことができたのです。

また、言い換えるならば、エルサレムの教会は、神学的には、異邦人の救いを信じることができましたが、まだ実践していませんでした。私たちも、多くを神学的に受け入れていても、実践していないことがありますね。主が用意された働きに関わることで、信じていることを実践します。

²³ バルナバはそこに到着し、神の恵みを見て喜んだ。そして、心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました。

異邦人が救いに導かれているのは、大きな恵みです。それで彼はとても喜んでいます。私たちも、「ああ、ここにいる人たちにも救いが訪れたのだ！」と、とても喜びますね。しかし、その後で大事なものは、励ますことです。「心を堅く保っていつも主にとどまっている」ように勧めていますね。英語では、フォローアップと言いますが、イエスを主として信じた人々が、その恵みにしっかりと留まっているように、心を堅くするように励ますことは、死活的です。

使徒パウロが、手紙を書く時は、このことを行っています。「コロ 2:6-7 このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい。7 キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおりの信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。」キリストに根ざし、

建てられ、そして教えられたとおりに信仰を堅くするのです。

また、テサロニケ人に対して、次のように勧めました。「Ⅰテサ 3:2-3 私たちの兄弟であり、キリストの福音を伝える神の同労者であるテモテを遣わしたのです。あなたがたを信仰において強め励まし、³ このような苦難の中にあっても、だれも動揺することがないようにするためでした。」パウロは、テサロニケの人たちには一カ月程度しか、一緒にいることができず、迫害者から逃げなければいけませんでした。それで、彼らの信仰がサタンによって誘惑されるのではないかと案じていましたが、彼らが信仰と希望、そして愛に満たされていることが伝わってきたので、とても安心しています。それで書いたのが、この第一の手紙です。

²⁴ 彼は立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった。こうして、大勢の人たちが主に導かれた。

「立派」というのは、外から来る良さではなく、内側の良さです。それが、聖霊と信仰に満ちているということと関わっています。神によって与えられた良さ、立派さです。バルナバは、仲間から「慰めの子」という別名を与えられ、それがバルナバという名前です。彼の働きによって、さらに大勢の人たちが主に導かれています。

3B サウロの参加 25-26

²⁵ それから、バルナバはサウロを捜しにタルソに行き、^{26a} 彼を見つけて、アンティオキアに連れて来た。

バルナバは、多くの人が主に導かれてるのを見て、一人でいるのが良くないと思ったのでしょう。サウロのことを考えます。ダマスコの途上で復活のイエスに出会い、それで福音を宣べ伝え始めましたが、エルサレムに行った時に、兄弟たちは彼を恐れしました。彼こそが、キリストの弟子たちを迫害する急先鋒だったからです。そこに、間に入ったのがバルナバです。彼がどのように回心したのか、そのいきさつを話しました。それで、サウロはエルサレムを自由に行き来できたのです。

サウロのことは、私たちはすでに学びました。バルナバも、キプロス出身で、けれどもレビ族のユダヤ人であり、ギリシアの世界と、ヘブル人の世界を行き来していた人でした。けれども、サウロはさらに一層のこと、異邦人への宣教に整えられた人でした。タルソは、ギリシア哲学や学問が発達した町です。けれども、親はユダヤ人で、かつローマ市民権がありました。ローマ市民権がありますから、宣教が困難な時に、ローマの権利を主張することができます。

そして、何よりも聖書を知っていました。親はエルサレムに、若いサウロを送り、そこでガマリエルという一流の学者の下で、律法を熱心に学びました。それで、聖書はキリストを証していること

をよく知っていました。そして、律法に熱心だったので、それを守ることがいかにできないか、人は恵みによって、信仰によって救われることをよく知っていた人でもあります。

バルナバ自身も、素晴らしい宣教者ですが、彼はサウロにその賜物と使命があることを見て取っていたのでしょう。自分自身に賜物が神から与えられているのを知ること大事ですが、こうやって、他の人に与えられている賜物と召命を見ることができる人がいるのも、貴重です。

しかし、すでにサウロがエルサレムから離れて 10 年近く経っています。アンティオキアから タルソは、200 ㎞ほど離れています。そこで、町に入って、ようやくサウロを見つけたことでしょう。私も 2019 年のトルコ旅行でアンティオキアからタルソまでをバスに乗って旅行しましたが、4 時間はかかったでしょうか、かなり遠い道のりでした。しかも山も連なっている所もあります。

^{26b} 彼らは、まる一年の間教会に集い、大勢の人たちを教えた。弟子たちは、アンティオキアで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。

バルナバは、主の恵みに留まるよう、励ましただけでなく、教えています。サウロも、この教える働きに加わっています。なんと一年間です。これが、非常に大切です。教会は、イエス・キリストの福音を宣べ伝えることには、熱心でも、神のみことば、神のご計画の全体を余すところなく教えることにおいては、希薄になりがちです。けれども、エペソ 4 章 11 節以降に、教会の姿があり、それが、牧師また教師による働きで、建て上げられる姿が出てきます。「4:11-13 こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。12 それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。13 私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」このように、教えることが、いかに教会の成熟に大切かが、分かります。

そして、「キリスト者と呼ばれるようになった」とあります。ルカが、これを執筆している当時は、他の名で、例えば「この道」という名前が良く使われていました。しかしここ、アンティオキアの人々は、人に面白い名をよく付けていたと言われており、それで、「キリスト者」と呼んだのです。キリストというのは、ユダヤ人が救世主だと思っていた存在なのですが、ユダヤ人のキリストに取りつかれてしまったな、みたいな蔑称だったのです。日本で言うと、「耶蘇」です。けれども、なんとふさわしい呼び名でしょうか？キリストのようだ、というような名です。

2A 預言と援助の働き 27－30

そして、このアンティオキアの教会は、宣教においても、援助においても、非常に活発な教会となっています。

²⁷ そのころ、預言者たちがエルサレムからアンティオキアに下って来た。

先ほど、エペソの 4 章を読みましたが、そこで、キリストが立てられた職務の中に、使徒だけでなく、預言者がありました。旧約時代は、預言者と言えば、神のことばを預かっている者であり、旧約聖書の多くが預言者からの言葉です。けれども、新約において預言というのは、信仰によって発せられた、励ましや慰め、人を養うことばが多いです。「Ⅰコリ 14:3 **しかし預言する人は、人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって話します。**」これから出てくるアガボですが、彼のように、先のことを予告して預言をする時もあります。

旧約聖書の時代との違いは、前者が神の普遍的な、標準的な言葉を語ったのに対して、新約の預言者は、地域における、その時に与えられた神のことばであり、聖書に記載されるものではないということです。この違いを混同して、今も預言の賜物があるという立場を、「聖書に付け足している」という人たちがいます。違います、信仰によって私たちが語ることばと、同じような権威であり、絶えず、変わることはない神のことばである聖書によって、吟味されるのです。

当時は、預言者たちは、ここにあるように巡回していました。それなので、手紙の中で、偽教師や偽預言者に対する警告も多く書かれています。惑わす者たちもいたからです。

²⁸ その中の一人の名をアガボという人が立って、世界中に大飢饉が起ると御霊によって預言し、それがクラウディウス帝の時に起こった。

クラウディウス帝の時には、歴史において、いくつかの飢饉が記録されています。クラディウス帝というと、パウロがコリントにいた時に会った、アキラとプリスキラが、クラディウス帝がローマからユダヤ人を追放したので、彼らがコリントに来ているという話が、18 章 2 節にあります。

²⁹ 弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに救援の物を送ることに決めた。³⁰ 彼らはそれを実行し、バルナバとサウロの手に託して長老たちに送った。

ここです、アンティオキアの教会は、霊的なことについても熱心でしたが、それが、物質的な援助においても現れています。まず、「**それぞれの力に応じて**」献げていますね。キリスト教会における原則です。「ガラ 6:10 **ですから、私たちは機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょう。**」そして、それぞれの力で行います。コリント第一 16 章には、「**収入に応じて**」という言葉が使われています(2 節)。

そして、「**ユダヤに住んでいる兄弟たち**」と言っていますね。エルサレムとユダヤの教会が、大飢饉によって非常に貧しくなったようです。彼らは、すべての財産を分かち合って共同生活をしてい

ましたから、このような危機に対して脆弱だったのかもしれませんが。

いずれにしろ、ここで、異邦人が主体のこの教会が、ユダヤ人の教会につながっていることを、
交わりがあることを、援助によって示しました。ユダヤ人であり、エルサレムと関係のあるバルナ
バそしてサウロを長老たちに送っています。パウロが、ローマの教会の人たちに、ユダヤの兄弟
たちのための支援金を携える理由をこう説明しています。「ロマ 15:27 彼らは喜んでそうすること
にしたのですが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。異邦人は彼らの霊的なものにあずか
ったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。」

このようにして、異邦人主体の教会が生まれました。使徒の働きは、13 章からアンティオキアの
教会が拠点となって、パウロとバルナバが遣わされるという宣教の働きが中心になります。そのこ
とによって、そこから西にある地域へ福音が伝えられて行き、最後はローマへと届きます。けれど
も、ローマ人への手紙を見ると、今度はローマが拠点となり、イスパニア、今のスペインへの宣教
のことが言及されています。

私たちが、今、カルバリーチャペルという聖霊の働きにあり、そして東京の中心部にあり、そして、
いろいろな人々が御霊の賜物が与えられ、そしてその関りから用いられて行っています。たった一
つの教会ではなく、いろいろな教会、いろいろな人々、いろいろな賜物が用いられて、それで、ただ
目標はかしらなるキリストです。そして建て上げられていくのです。